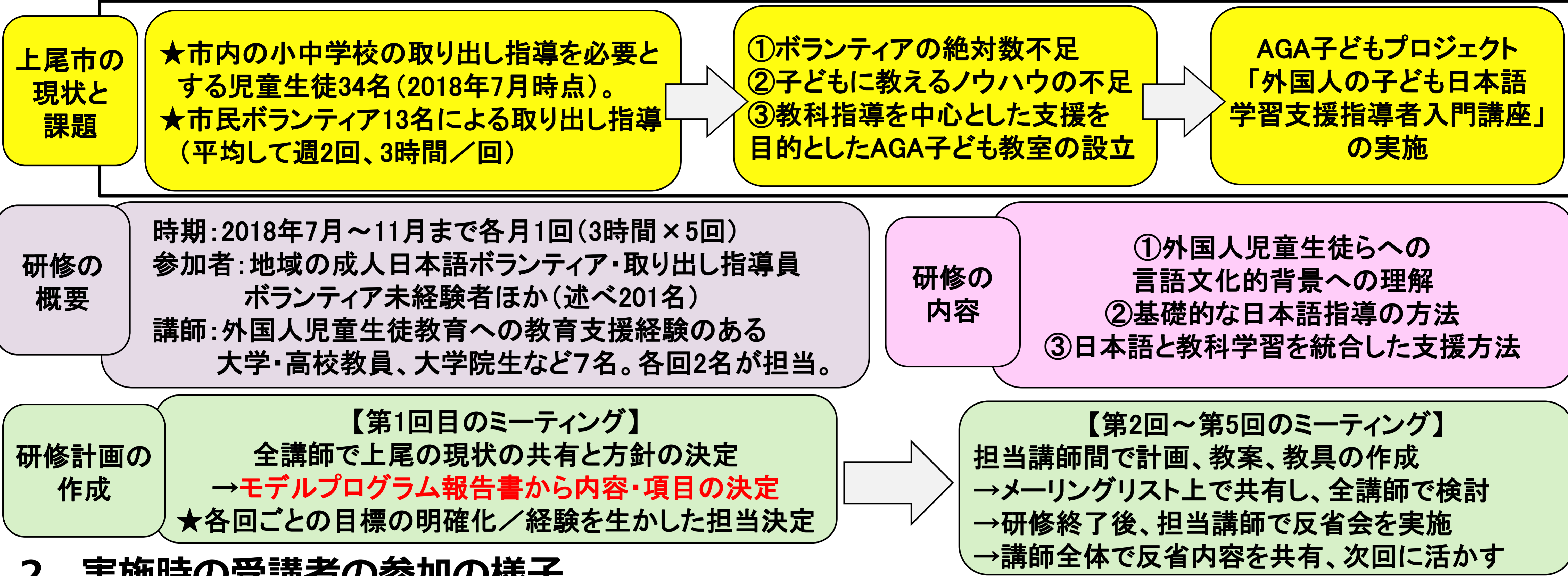


# 地域における外国人児童生徒への日本語学習支援者養成研修

—AGA子ども教室の設立に向けて—

三好大（東京学芸大学大学院）・工藤聖子（早稲田文化館日本語科）

## 1 授業・研修等の実施計画



## 2 実施時の受講者の参加の様子

**第1回「子どもの日本語学習支援の現状と課題を知る」(①⑥⑬)**

●上尾市の現状と課題に関して、市の担当者や指導員からの情報共有を行った。その後、講義と事例紹介を行い、それをもとにグループワークを行った。

**第2回「文化間移動をする子どもの発達と学習過程」(⑩⑪⑫)**

●前半は子どもの言語習得に関する講義、後半はアイデンティティと言語の関連性についての事例をもとに、自己肯定感を高める支援のあり方をグループワークを通して検討した。

・自己肯定感を高めることが本当に大切なのだと痛感しました。  
 ・自ら学ぶ姿勢のない子供を否定的に見ていたが、日本に来た背景、年齢、心情など多角的に見つめていく事が大切

**第3回「日本語学習支援の方法」—初期段階の学習支援(⑰⑱)**

●初期指導の概要についての講義の後、初期指導とサバイバル指導の例を示した。指導の要点についての講義後、パターンプラクティスを中心にペアで活動を計画した。

・ペアワークで具体的な方法を学べたが、実際にやると難しかった。  
 ・ステップを踏んで少しずつという点が参考になった。難しい表現は避けてシンプルにすべきと思いました。

**第4回「日本語学習支援の方法—初期段階の学習を終えた子どもへの学習支援」(⑰⑱)**

●ロールプレイやインタビュー、さいころを用いた活動を、ペアやグループで模擬的に体験したり、実際に教具を作成した。会話を中心とした活動の方法を紹介した。

・サイコロ活動は発言しなくてはならない場づくり、話題作りに最適だと思いました。  
 ・教材を手作りするのは困難と思っていたが積極的に作ってみたいと思うようになった。

## 第5回「日本語を生活と教科学習に結ぶ支援」(⑬⑳)

●国語の説明文や算数の文章題のリライト教材作成を通して、教科と日本語を統合して日本語を指導する際のポイントを示した。最後に、キャリア形成の視点から講義を行った。

・具体的な教材、小学校の先生の実践例etcが参考になった。  
 ・教科の支援はできないと思っていたが、私でも出来る支援があることを知った。

・子供の将来を深く詳しく考えた指導がむずかしそうです。・その子の能力を十分に引き出してあげられるサポートが自分に出来るか不安

## 3 研修の成果と課題

**【成果】**

- 全5回の講義では、日本語指導の方法に加え、言語習得やキャリア形成など多角的な視点を培うための内容も扱った。  
 →参加者の長期的な支援の重要性への言及や子どもへの見方への変化が表れていた。
- 講義だけでなく、ペアやグループでの活動を取り入れた。  
 →実際にやってみることで困難なところが明らかになったり気づきを得られたという声が寄せられた。

**【課題】**

- 参加者は背景が多様、かつ毎回入れ替わるため、事前にニーズを十分に把握することが困難  
 →指導経験の有無によって、理解度や活動への参加の度合いに差が見られた。
- グループでの活動に不慣れな参加者が多数  
 →意義の説明および継続的な実施で積極的な参加がなされた。

## 4 モデルプログラムについて

**【参考になった点】**

- モデルプログラム例において、具体的な活動や所要時間、取り扱う範囲が明示されており、研修を構成する手掛かりになった
- 複数の講師が研修を担当する場合、モデルプログラムを中心に検討する事で、研修項目が明確になった

**【改善点】**

- 支援員の養成に関するモデルプログラム例が少ない。
- 教科と統合した日本語指導に関しては、具体的な例の充実が求められる